

番号	教材名	貸出個数
11	ポリカデシケーター (300GA2 型)	1

【教材の特徴】

- ・ポリカーボネート製の軽量・強靱な真空デシケーターです。
- ・本体とフタの接合部にグリースを付けずに真空を保持できるよう、精密な形成加工が施されています(Oリング付き)
- ・真空計によって使用時の真空度を確認することができます。
- ・コックが 2 個装備されているので真空引きと大気圧解放の動作を別々に行うことができます。

・ポリカデシケーター ・真空ホース ・シールテープ
 〈併用〉ドライ真空ポンプ(当施設で貸出可:教材番号 13)

【使い方】

〈準備〉

- ①本体を袋から取り出し、フタの上部に真空計を取り付けます。(ネジの部分にシールテープを軽く引っ張りながら 2～3 周(10cm未満)巻きます。ネジ口に対して垂直にし、ゆっくり少しずつネジを回して止まる少し手前で止める様にします。)
- ②2つあるバルブのうち、下のバルブに真空ホースを取り付け、真空ポンプ吸気口とつなげます。
- ③ホースをつなげたバルブのコックをホースと平行にして開通させます。もう一つのコックは空気が逃げないようにホースに対して垂直にして閉めます。(ガス栓と同じ原理です)
 ※両方閉じる場合は上のコックは下に、下のコックは上にします。

〈実験〉

- ①容器にフタをします。
- ②真空ポンプを作動させ、容器中の空気を抜いていきます。
- ③ある程度真空状態になったら、容器と真空ポンプをつないでいる真空バルブのコックを閉めて真空状態を維持します。
- ④実験が終わりましたら、ホースがついていない真空用バルブのコックを少しずつ床と平行に戻し、外の空気をゆっくり容器の中に取り込んで元の気圧に戻していきます。
 ※一気に外気が流入すると内容物が飛散し、真空計や真空バルブの故障の原因になります。

〈片付け〉

- ①真空ポンプの電源を切ります。
- ②真空用バルブから真空ホースを抜きます。
- ③フタを取り外し、真空計をフタの上部から取り外しておきます。

※準備の時に張り付けたテープは剥がしてください。

【実験例】

〈風船を使った実験〉

- ①容器に少し空気を入れた風船を入れます。
- ②真空ポンプを使って中の空気を抜き、気圧を下げていきます。
- ③風船が真空状態で膨らんでいきます。
- ④外の空気を少しずつ容器内に取り入れると風船はしぼんでいきます。

【注意事項】

- ・ 本教材はポリカーボネート製であり、軽くて、強じんですが真空強度は 133Pa です。これ以上の真空度になると破損の恐れがあります。真空計のメモリ内で使用してください。
- ・ 本教材内を真空にする又は、常圧に戻す場合はバルブをゆっくりと解放し、急激な圧力の変化が起こらないようにしてください。容器は耐真空設計ですが、目に見えない樹脂の劣化等が発生していた場合、破損・飛散のリスクが高まります。
- ・ 飛散しやすい粉末状のものを入れる場合は、飛散ないようにフタ被せる(密閉はしないでください)など飛散防止の措置をとってください。粉末がバルブや真空ポンプへ流入すると、本製品および真空ポンプが故障する恐れがあります。
- ・ 真空計を装着する際、バルブの特に取り付けの根元に無理な力が加わらないようにしてください。
- ・ 真空度の保持が悪い場合、フタと本体の接合部や O リングの汚れ、破損、真空バルブ及びその取り付け部の不具合がないかご確認ください。
- ・ 樹脂表面に傷やヒビ等の劣化が発生している場合は使用をしないでください。
- ・ 減圧がうまくできない場合は、真空ポンプ作動時に軽くフタを抑えてみてください。

【仕様】

型番		300GA2 型
材質		ポリカーボネート
減圧許容度		133Pa(1Torr)
真空計		1.6 級 目盛:0～-0.1MPa
真空バルブ		ホースニップル付き(外径:9mm)
Oリング(JISB240-1 種 A)		G30
サイズ	最大外形	367mm
	最大内径	306mm
	全高	436mm

真空計(共通):2-931-03-01 -0.1MPa 1.6 級φ60(R1/4)

真空バルブ(共通):1-066-21-01

Oリング:G30:/1-066-09

シールテープ:1-2702-01 ナフロンシールテープ 0.1×13×5M

【容器寸法】

フタ内部幅	約 230mm
底部内高さ	約 297mm
フタ内幅	約 110mm
容器内高さ	約 130mm
全体容量	約 21.6ℓ